

非認知能力の育成に 関するメモ

無藤 隆（白梅学園大学）

乳幼児期のネットワーク的な（網目状の）学びと小学校以降のリニア（系列的）な学び

保育（幼児教育）と小学校以上の教育と対比して学びのあり方の違いとして次のように整理できる。

ネットワーク的学びとリニアな学びの違いである。

小学校の学習は教科ごとに直線的（リニアな）系列を想定し、その前に進むと理解して次に進むように力やリキラムを細部まで作り、その通りに進めていく。たとえば、足し算があり、引き算があり、かけ算があり、そして割り算となっていく。

幼児教育ではそのような進むところはない。徐々に大きな意味での進歩的変化はある。たとえば、雪や氷が冷たい、手前に乗せると溶けてくる、雪や氷は水にならない。たまたま、雪や氷が冷たい、手前に乗せると溶けてくる、雪や氷は水にならない。

たとえば、雪や氷が冷たい、手前に乗せると溶けてくる、雪や氷は水にならない。たまたま、雪や氷が冷たい、手前に乗せると溶けてくる、雪や氷は水にならない。

認知能力と非認知能力を育てる

認知能力とは知的な力である。そこには、知識・技能、思考力などを含める。

非認知能力とは意欲・意志、また自覚し見渡す力、人と協力する力などを含める。つまり、学びに向かう力の育ちである。

どちらも、乳幼児期（さらに学童期・思春期）を通して育つものである。

認知と非認知は相互に関連し、支え合って、育っていく。

1つの活動の中に認知面と非認知面が必ず含まれ、共に育つ。

いずれも資質・能力の基礎を保育のプロセスとして捉え、子どもが意欲を持って取り組み（学びに向かう）、様々なことを見いだし（気づき）、試行錯誤しながら工夫すること（思考力の芽生え）が生まれ、発展していくことを大事にする。

非認知的力が育つ場面とは

たとえば、こういう活動の中で特に非認知能力が現れ、伸びていくのだろう。

部屋でも庭でも散歩でも何にでも興味を持って関わろうとする。
やりたいことを思いついたら積み木でも縄跳びでも何度でも挑戦し工夫してやり遂げようとする。

ドッジボールなどのルールを自覚し、新たなルールが一つ加わったらそれを守って遊ぶ。

してはいけないやり方と、してよいやり方が分かったら、よいやり方での工夫をする。

工夫するとき友達と相談する。

先を考え、目標を立てて、それに向けて回り道でも何とか進めていく。